

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：32605

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884046

研究課題名(和文)近世京都の文化的多様性に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Basic Research on Cultural Diversity in Early Modern Period Kyoto

研究代表者

岡田 万里子 (Okada, Mariko)

桜美林大学・人文学系・准教授

研究者番号：60298198

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、従来画一的にとらえられてきた京都文化を再考し、江戸時代の京都における文化や芸術の多様性を論じることを目的とし、五摂家筆頭の近衛家当主夫人の日記に、近世後期の公家と民衆とが絡み合う文化の記録を見出した。すなわち、公家の奥向きには、使用人として奉公にあがる女性が多く存在し、夫人を中心とする近衛家の人々と彼らの実家との交流が見られるほか、市内の寺社への参詣、芸能の見物など、多彩な活動の実態を知ることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project was to discuss diversity of art and culture in Kyoto during Edo period (1603-1867) and to reconsider Kyoto culture then which was stereotyped as a mere shell of court culture. In the diaries of wives of Konoe family which is the head of five family lines that produce regents, intercommunion between court aristocracies and commoners was recorded. Girls of common families started serving the Konoe family as maid in their teens and quitted on their marriage. Their family home exchange letters and gifts with the Konoe's. They also went to temple and shrines in Kyoto and also went to see performances with women and children of Konoe family. The close exchanges between court aristocracies and commoners illuminate the diversity of Kyoto culture in Edo period.

研究分野：人文学

キーワード：京都 文化 多様性 芸能 記録

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、従来の研究過程において京都陽明文庫所蔵の近衛家 24 代当主近衛経熙夫人董子の日記『円台院殿御日記』の存在を知り、当時の研究対象であった京舞井上流史に有用な部分のみを特化して利用し、著作をまとめたが、当該日記は利用箇所以外にも興味深い事例もあり、全貌を研究する必要性がみとめられた。

(2) 近世期の京都の研究は、政治の中心が江戸に移るなかで軽視されており、研究の俎上にのることが少なかった。近世初期は、まだ民衆文化が論じられるものの、後期の研究は非常に少なく、その空白を埋める必要性があった。

2. 研究の目的

(1) 従来断面的かつ画一的にとらえられてきた近世期の京都文化を、記録に基づいて具体的に見直すことを目的とした。

(2) 宮廷と民衆を二項対立的に対比させる歴史研究の構造を批判し、五撰家筆頭の近衛家の当主夫人による日記を中心とする史料から、両者をむしろ有機的に関連させて、新たな京都文化を発見し、議論の対象として機能させようとした。従来の京都文化研究における問題点には以下のようなものがあった。

近世京都は、唯一宮廷を擁する土地であるゆえに、独特な位置を占めていたとされ、その文化・芸術的な面においても宮廷文化の影響が指摘されてきた。

その一方で、洛中洛外図などに描かれた活気ある芸能の町としても把握され、それを支える民衆文化も論じられてきた。しかし、後者については、祇園祭を代表とする初期の町衆文化や、まだ歌舞伎の中心が四条河原にあった頃の初期歌舞伎は多く論じられるものの、その後は幕末の「ええじゃないか」まで、近世京都の文化的側面は看過されている。

3. 研究の方法

(1) 基本データの整理

天明 8 (1788) 年から天保 12 (1841) 年まで半世紀以上に渡って書かれてきた『円台院殿御日記』全 40 冊の膨大なデータをまず整理する必要があり、キーワードを中心にデータベース化した。本文の翻刻に関しては、すべては行えなかったため、重要な箇所のみ本文のデータを付加した。

(2) データの解釈

日記という、書いた本人にのみ分かる心覚えの資料であるため、事項名、人名、地名に関しては略称も多く、解釈が容易でない事柄も多かったため、総合的な研究が必要であった。そのため(1)のデータベースを利用し、事項名・人名・地名について解釈し、注をつける形で理解の助けとした。

(3) 『常興善院殿御日記』『忠熙公記』

『円台院殿御日記』のほか、近世期の近衛家の当主夫人の日記としては、近衛基熙夫人常子内親王の『無上法院殿御日記』(寛文 6 (1666) 年～元禄 13 (1700) 年)、近衛忠熙夫人興子の『常興善院殿御日記』(天保 15(1844)年～弘化 3(1846)年)の二例も知られている(「陽明文庫所蔵近衛家三夫人の日記」『二松学舎大学東洋学研究所集刊』2号、1972年3月、135-156頁)。さらに、当主が残した公記類についても、隠居後の記録は自由な記述も増えることを確認済みであり、安政の大獄に連座し、明治 31 年に 92 歳で没した近衛忠熙の『忠熙公記』には、近代京都の文化人との交流が記録されている。すでに『无上法院殿御日記』に関しては研究が行われているため(瀬川 淑子『皇女品宮の日常生活-『无上法院殿御日記』を読む』岩波書店、2001年)、『円台院殿御日記』と時代も同様の『常興善院殿御日記』と隠居後の近衛忠熙の『忠熙公記』に調査対象を広げた。

(4) 記事に基づく近世京都文化の見直し

以上の日記の調査により、近世京都文化を様々な観点から見直す研究を行った。特に、近世階級社会における階級を超えた人的交流のあり方、さらにはその交流が創造した新たな文化を見出し、近衛家奥向きの女房の活動や、近衛家奥向きが担った文化活動について考察した。

4. 研究成果

(1) キーワードデータベースの構築

『円台院殿御日記』全 40 冊の事項を整理した。具体的にはキーワードをエクセルファイルに入力し、検索が可能となった。日記本文の翻刻は必要最低限にとどめたが、データのデジタル化により、作業の効率化が達成された。また、事項・人物・場所に関する名称をピックアップし、それぞれ調査を行った。人名に関しては、位があがるごとに改名も行われている様子が判明した。また、略称による記載も多いため、データを蓄積して効率的な解読を試み、判明したケースも多数にのぼった。

(2) 撰家女房の活動に関する研究

『円台院殿御日記』のなかには、祐筆の女房が記した御傍日記が存在するが、近衛家に奉公にあがっていたと考えられる女房たちは、祐筆としての活動のほか、外出の供や配膳、子供の遊び相手など、様々な役割を果たしていた。芸能記録のなかには、雅楽や舞楽だけでなく、能楽、浄瑠璃、盆踊、さらには曲馬のような巷間の芸能までが含まれており、実に多彩な芸能が撰家の奥で上演されてきたことがわかった。さらには、女房の数人が、外から訪れた芸能者とともに音楽や舞踊を演じていたかと思える記事もあった。京

舞井上流の創始者は、近衛家の女房の「おはしため」にあがったと伝えられているが、あらためて日記の全貌を見渡した上で、女房の活動を追い、女房のなかには、家族同前の扱いを受けている例も見出すことができた。

(3) 撰家奥向きの人的ネットワークの研究
近衛家当主夫人とつきあいのあった人物が明らかになり、屋敷の外から訪れる文化人や芸能人を中心とした人的ネットワークの存在を確認した。これらを当時の有名人リストでもある『玉づくし』のような史料や、能や人形浄瑠璃の史料と照合し、近衛家を取り巻いた人物交流に関して調査研究を行った。

(4) 月待ちと慰事の研究
『円台院殿御日記』の調査を通して、撰家奥向きの定期的な文化活動は、特別な場合を除くと月待ちという信仰行事の際に行われることがわかってきた。特にこの日記を記した円台院宮董子は愛染明王を信仰していた様子が名号を記した一冊からわかっており、二十六夜の月を信仰していたようである。月待ちは、撰家に限らない一般的な行事であるが、こうした風俗との関連について研究を行った。明け方に出る二十六夜の月を待つために、饗応があり、また慰事と呼ばれる演芸を見たようである。日記に散見するこれらの記事をまとめることにより、撰家奥向きと風俗との関係を知ることができた。

(5) 撰家の文化的役割に関する研究
本研究から明らかになる撰家の文化的役割とは、端的には伝統を演じるということと想定されたため、伝統を所与のものとして考えるのではなく、構築されたものと理解する立場を追求した。たとえば、近衛家は当主夫人の日記は稀でも、当主は必ず公記とよばれる公の日記を残してきており、それは平安時代より続く撰家の義務でもあった。こうして記録をとり、次代に継承していくというあり方は、まさに伝統の保存管理ともいうことができる。研究代表者は、従来から伝統の演じ方といった問題に触れてきており、国際学会やシンポジウムにおける場において、「伝統」が演じられることにより継承されてきたという議論を行い、反響を得ることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

山路興造・村上忠喜・大谷節子・岡田万里子・中尾薫、京都における「伝統」という言語-大念仏狂言・能楽・京舞・祇園祭を例として(「演劇・地域・言語」シンポジウム) 演劇学論集日本演劇学会紀要、査読無、60号、2015年、93-114頁。

岡田万里子、京舞井上流と古都京都の自画像、亜細亜大学学術文化紀要、査読無、27号、2015年、74-75頁。

https://asia-u.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=62&pn=1&count=20&order=8&lang=japanese&page_id=26&block_id=43

〔学会発表〕(計12件)

Mariko Okada. Inheriting Cultural Preservation: Six Decades of Japanese System for Protection of Intangible Cultural Properties(文化保護の継承 日本の無形文化財保護制度の60年)、《International Symposium》Authentic Change in the Transmission of Intangible Cultural Heritage(国際シンポジウム「無形文化遺産の継承における『オーセンティックな変更・変容』」) 2016年3月11日、国立民族学博物館(大阪府吹田市)。

岡田万里子「近衛家当主夫人日記にみる近世後期京都の芸能」、藝能史研究会例会、2016年2月12日、キャンパスプラザ京都2階第2会議室(京都府京都市)。

岡田万里子「京舞井上流と祇園女紅場の稽古法」シンポジウム「わざ継承の歴史と現在 身体・記譜・共同体」、2015年9月13日、法政大学市ヶ谷キャンパス外濠校舎5階S505教室(東京都千代田区)。

Yoshihiro Mochizuki, Mariko Okada, “Skills and Strategies for Deciphering Handwritten Japanese Documents,” 全米翻訳者協会(ATA)第56回年次会議、2015年11月7日、Miami Hyatt Regency(マイアミ、米国)。

Mariko Okada. “Dance for Consolation,” Psi (Performance Studies International) 2015 TOHOKU BEYOND CONTAMINATION: Corporeality, Spirituality and Pilgrimage in Northern Japan(国際パフォーマンス研究学会)、2015年8月31日、青森県立美術館(青森県青森市)。

Mariko Okada. “Japanese Pageant: Theater as an Educational Instrument for Democracy” International Federation for Theater Research(国際演劇学会)、2015年7月10日、Hyderabad University(ハイデラバード、インド)。

岡田万里子「京舞井上流と祇園女紅場」現代能楽における「型」継承の動態把握 比較演劇の視点から」第6回研究会、2015年4月23日、於法政大学能楽研究所会議室(東京都

千代田区)。

Mariko Okada “ Consuming Art: Fan Culture and Actor Prints in Modern Japan,” Research Panel “Acting Modern: The Changing Face of Kabuki and Meiji Print Culture,” Association for Asian Studies Annual Conference (アジア学会), 2014年3月29日, Chicago Sheraton Hotel and Towers. (シカゴ、米国)

岡田万里子「歌舞伎ファンダム研究の可能性」歌舞伎学会秋季大会、2014年12月13日、東京女子大学(東京都杉並区)。

山路興造・村上忠喜・大谷節子・岡田万里子・中尾薫、シンポジウム「京都における「伝統」という言語-大念仏狂言・能楽・京舞・祇園祭を例として-」日本演劇学会秋の研究集会、2014年11月15日、京都外国語大学(京都府京都市)。

岡田万里子「地歌芝居歌物の研究～研究史を中心に～」演劇研究会8月例会、2014年8月23日、同志社大学。

Mariko Okada “ Becoming ‘ Classical ’ : Kyōmai and Theatre History. ” Research Workshop of the Israel Science Foundation, Performing Japanese Traditions: Temporal and Spatial Reconsideration of Dramatics, Poetics and Ritual Practices, 2014年6月16日 Tel Aviv University (テルアビブ、イスラエル)

〔図書〕(計1件)

Paul Griffith, Okada Mariko. “ Interlude: Nihonbuyo: classical dance ” in Jonah Salz, ed., A History of Japanese Theater, London: Cambridge University Press, pp.141-149, 2016.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 万里子 (OKADA, Mariko)
桜美林大学・人文学系・准教授
研究者番号：60298198